

聖書：使徒 16：1～10

説教題：神が私たちに招いて

日時：2014年3月16日

パウロとバルナバは、第2回伝道旅行にマルコを連れて行くかどうかを巡って別行動を取ることになり、パウロはシラスを選んで出発します。その彼らが向かったのは先の伝道旅行で宣教した小アジアの町々でした。今回は前回と反対に東から西へ進んで行きます。そのため、前回は一番最後に訪問したデルベにまず向かい、それからルステラへ進みます。そこでパウロはテモテと会います。このテモテはこれ以後、パウロの愛弟子となる人です。彼はパウロの多くの手紙の共同執筆者として、その名が記されています。またテモテに対する手紙も新約聖書に二つ収められていて、そこでは「信仰による真実のわが子テモテ」とか、「愛する子テモテ」などと呼びかけられています。テモテが「パウロの子」と呼ばれているのは、おそらく第一回伝道旅行の時に母ユニケ、祖母ロイスと共にイエス・キリストへの信仰へ導かれたからでしょう。そのことはルステラ宣教の記事には記されていませんでしたが、多くの注解者は、パウロ自身その時はそのことを知らなかったからだろうと言っています。今日の箇所も1節にも「そこにテモテという弟子がいた」と書かれています。これはパウロにとって非常に慰めだったのではないのでしょうか。先の伝道旅行でパウロは厳しい迫害を受けました。特にルステラでは石打ちにされ、瀕死の状態になって町の外に引きずり出されました。おそらくこの出来事と関係する形でテモテの家族はパウロの福音に心を留めるようになり、信仰へ導かれたのでしょう。そしてパウロが再びこの町にやって来た時に、テモテはルステラとイコニオムの兄弟たちの間で評判の良い立派な青年となっていたのです。ただひどい目に会っただけのようなルステラ宣教でしたが、神はそこからこのような良いものを取り出してくださったのです。

パウロはこのテモテを連れて行く際、ユダヤ人の手前、割礼を受けさせたと3節にあります。私たちはこれを読んで戸惑うかもしれません。なぜなら救いのために割礼は必要ないというエルサレム会議について私たちはたった今、学んだばかりだからです。よくこれとの関係で引き合いに出されるのはテトスです。ガラテヤ書2章3～5節に記されていますが、パウロはテトスを連れてエルサレムに上る際、決して彼に割礼を受けさせなかったと記されています。この一見食い違いがあるように見える彼の行動はどのように説明できるのでしょうか。パウロは救いの真理が問題にされる時は、決して割礼を受けることを許容しませんでした。もしそれをすれば、キリストへの信仰だけでは十分でなく、それに私たちの行ないをプラスしなければならないという印象あるいは誤解を与えかねないからです。しかしそのことが問題にならない場合、パウロは福音をより良く宣べ伝えるために割礼を受けることを良しとしたのです。3節の最後に、テモテの父が「ギリシヤ人であることをみなが知っていた」とあります。すなわちテモテは父がギリシヤ人で、母がユダヤ人であることを人々は知っていた。そんな彼がこれから宣教の働きに従事するにあたっては、割礼を受けている方が宣教しやすい。割礼を受けていなければ、ユダヤ人の会堂で説教することさえ許されないかもしれません。今やキリストを信じているパウロやテモテにとって、割礼を受けることは何の意味もないことです。単に外科手術をも

う一つ余計に受けることに過ぎません。しかしそれをするによって、より宣教に仕えることができるなら、進んでそのようにするというのがパウロの姿勢でした。Ⅰコリント 9 章 20 節：「ユダヤ人にはユダヤ人のようになりました。それはユダヤ人を獲得するためです。律法の下にある人々には、私自身は律法の下にはいませんが、律法の下にある者のようになりました。それは律法の下にある人々を獲得するためです。」

こうしてテモテを加えて 3 人となったパウロの一行は、町々を巡回してエルサレム会議の決議事項を伝えます。この町々はパウロが先にガラテヤ人への手紙を書き送った町々です。その彼らに救いはただイエス・キリストを信じる信仰によるというエルサレム会議の決議事項を伝えることを通して、諸教会の信仰は強められ、その宣教活動は豊かに祝福されたのです。

それから後にパウロたちがたどった行程が 6 節以降に記されています。6 節：「それから彼らは、アジヤでみことばを語ることを聖霊によって禁じられたので、フルギヤ・ガラテヤの地方を通った。」おそらくパウロたちはアジヤに行こうと計画していたのでしょうか。デルベ、ルステラ、イコニオム、ピシデヤのアンテオケと進んでそのまま西に進めばアジヤ州に入ります。そしてその先にはアジヤの大都市エペソがあります。しかしそのアジヤへ進むことを禁じられてしまいます。そこでパウロたちは西に進むことを断念し、北へ進路を取ります。そうしてしばらく行った後に直面したことが次の 7 節です。こうしてムシヤに面した所に来たとき、ビテニヤのほうに行こうとしたが、イエスの御霊がそれをお許しにならなかった。」北にそのまま進めばビテニヤ州に入ります。パウロたちはそうして小アジア北部、黒海沿岸の町々に伝道しようと考えたのでしょうか。ところが再びそれ以上、先に進むことが禁じられてしまいます。そこでまた西へ進路を取り、トロアスに下ったと 8 節に記されています。大変興味深い記録です。私たちはここに何を見るのでしょうか。それはあのパウロも神の御心がはっきり分からず、右に行ったり、左に行ったり、さ迷うように進んでいた時があったということです。あっちに行こうとしてダメ、こっちに行こうとしてダメ。道が連続して閉ざされる。ここに聖霊によって禁じられたとか、イエスの御霊がそれをお許しにならなかったとありますが、具体的にどうということなのでしょうか。これは一緒に同行していた預言者シラス、あるいはテモテ、あるいは彼らが通った町の信者たちを通して聖霊の預言があったということかも知れません。あるいはキリスト教への何らかの反対活動、妨害活動があったのかもしれない。あるいは病気や事故、その他の出来事によったのかもしれない。いずれにしろ、あなたが進もうと思っているその道を進んではならないというストップがかかった。願っていた道が連続して閉ざされる。そういう時がパウロたちにもあったのです。

パウロたちはある意味で仕方なく、トロアスへとやって来ます。小アジアの西の端です。なぜこの地に來ただろうかと思われるような行き止まりの場所です。彼らは強いられるようにしてここにやって来ました。しかしその夜でした。パウロは幻を見ます。それは一人のマケドニヤ人が彼の前に立って、「マケドニヤに渡って来て、私たちを助けてください。」と懇願する幻でした。パウロにとっては驚きだったでしょう。小アジアの西端まで来て、この先どう進んだら良いかと困惑していた時、何と目の前のエーゲ海を渡って向こうに来るよにとの幻を受けたのです。すなわちヨーロッパへ渡って来るよにとの招きです。パウロは仲間たちとこの

幻の意味について話し合います。ここから「私たちは」という書き方が始まります。「私たち」というのですから、この書の著者ルカが伝道旅行に加わったことを暗示しています。ですからここには少なくとも、パウロとシラス、テモテとルカの4人はいたこととなります。その彼らは話し合う中で、神が私たちをマケドニヤに招いて、そこにいる人々に福音を宣べさせるのだと確信したのです。

彼らがこの確信を持つに至ったいくつかの要素を考えてみたいと思います。まずそこには否定面と肯定面の両方がありました。彼らはただマケドニヤ人の幻からだけ、神の導きを確信したのではなく、これまで様々な道でドアが閉ざされて来たことも考えに入れたでしょう。すなわち私たちの目に否定的に見えることは無意味ではないということです。道を閉ざされることや、思う通りに行かないことにおいても神はご自身の御心を示しておられるということです。

二つ目に注目することは、10節の「確信する」という言葉です。これは「いっしょに結び合わせる」という意味の言葉です。すなわち彼らは色々なデータを一緒に結び合わせてこの確信を持った。ただ特殊な体験をして、「これぞ聖霊の導き！」と言って進んだのではなく、「良く考える」という合理的な側面がここにはあるということです。そしてその際、やはり聖書の御言葉が大切なガイドラインとなるべきでしょう。単なる状況から「これは神の摂理だ！」とか「神の導きだ！」と言うのは危ない。その代表的な例はヨナ書1章におけるヨナです。ニネベに行って宣教しなさいと言われたのに、ヨナは神に従わずヨッパに下ります。するとちょうどそこへニネベとは反対方向へ行くタルシシュ行きの船を見つけます。これを見て「これは導きだ！この船に乗るよ」という摂理だ！」と言えなくもありません。しかし実際、ヨナは主に逆らっていたのですから、これが主の導きであったはずはありません。ですから状況だけから判断するのではなく、みことばの原則の光の下で吟味される必要があります。これは単に自分に都合がいいから神の導きだと私は言おうとしているのではないか。楽な道だからそれを選ぼうとしているだけではないのか。自分の計画を通したくてそれを正当化するために都合の良い情報だけを並べてこじつけているのではないか。私たちは神の御心と言うためには、本当にへりくだって良く考えなければなりません。

そしてもう一つ、ここで彼らは共同体的に確信しています。「私たちは」確信した、とあります。本当にそれが神の御心なら、通常は同じ聖霊を持つ他の兄弟姉妹によっても確認・確信されるはずですが。他の人が首を傾げているのに、一人だけ独善的にこれは神の御心だとか、神の導きだと主張することには慎重でなければなりません。

彼らはこうしたプロセスを経て、10節の確信を持ちます。その時、彼らの目の前の風景はそれまでとどんなに違って見えたことでしょうか。彼らはこれまでアジヤに行こうとか、ピテニヤに行こうと考えていましたが、神はヨーロッパへ行くように導いておられたのです。そのように思って眼前に広がるエーゲ海の島々を眺めた時の彼らは、どんなに目からうるこが落ちる思いになったことでしょうか。昨日までは行き止まりとしか見えなかったトロアスの地が、広大なヨーロッパ大陸への玄関口に見えて来たのです。対岸の島々が自分たちに向かって「おいで！おいで！」と手招きしているように見えて来たのです。朝の光を受けて輝く水面は、何とそれまでの彼らの暗かった心を希望で満たし、勇気づけるものだったでしょうか。神はいつも

導いておられたのです。これからも導いてくださるのです。

私たちはどうでしょうか。私たちも今日の箇所(6節7節)のパウロたちのような日々を過ごしているかもしれません。何をやってもうまく行かない。どう進んでも道は閉ざされる。否定的なことばかりが続く。しかしそれは神が私たちに何も良い考えを持っておられないということではないのです。むしろ私たちがここに学ぶことは、神はそこにもご自身の積極的な御心を持っておられるということです。私たちの思いや計画とは別の考えを神は持っておられて、そこへ導くために、私たちが進もうとする道を妨げられるということがある。その時、私たちは長いトンネルの中にいるような気持ちになるかもしれません。妨げばかりで、落胆しそうになるかもしれません。しかし神はご自身のきよく賢い御心を持っておられます。そしてそこへ導くために、今日も私たちの上に力強い御手を伸ばしていてくださるお方です。そのような奇しい主の摂理の御手が今日も自らの上にあることを見上げたいと思います。その時は分からなくても、神はきちんとご自身の計画を持って導いて下さっています。行き止まりと見えた地から、眼前にエーゲ海が拡がって見える時を与えてくださいます。このために神は今まで導いて下さっていたのだ！と確信をもって知る時を与えてくださいます。そのように導く御手が私たち一人一人の上にあることを覚えて、この神に導いていただく信仰者の幸いと、日々望みと力に溢れる歩みへ進みたく思います。